

日本学生科学賞受賞の村本哲哉君 (附属高校)

第47回国際学生科学技術博覧会

日本代表として出場

文
写真・村本 哲哉
Muramoto, Tetsuya



会場で各国の参加者たちと交流する村本君(中央)。右端のパネルが村本君のもの。



ブースの並ぶ審査の行われた会場。

五月五日から十一日にかけて、アメリカのアリゾナ州ツーソンで開催された「47th International Science and Engineering Fair」に、日本代表二名のうちの一人として参加してこのほど帰国した。この分野におけるアメリカその他の諸外国の底力を改めて見せつけられた大会であった。同大会には、世界の約四十の国と地域から一〇七一人の学生が参加。それぞれ各国の科学賞で優秀な成績を収めた者が一堂に会するものである。この大会における優勝者は、ノーベル賞の授賞式に招待されるというたいへん夢を与えてくれるものである。日本からは「日本学生科学賞」(読売新聞社など主催)の代表二名が臨んだ。

結果として「Eastman Kodak Company First Place Award」を受賞することができた。しかし自分としては、この賞の受賞よりも出場した学生と友達になれたことの方が貴重な財産になるのではないかと思う。「学生との交流」これが最も印象に残る大会であった。その一方、アメリカ人の交流のうまさには驚かされた。コーラと場所さえ与えれば勝手に交流は進行する。踊りだす者、歌い出す者さまざま。

この大会に参加し、アメリカの研究のレベルの高さを見せつけられた。アメリカの高校生は、ボランティア活動に参加しながら大学の施設を利用していろいろである。そして、こうした課外活動も大学進学の際に大きく評価されるという背景の下で、高校生たちは安心して研究に打ち込めると語っていた。

人間の能力の伸びる中・高校生の時期に研究に打ち込めるアメリカに対して、受験勉強という壁の下でしなくてはできない日本とは、出発点において大きな水をあげられているように感じた。

またこれが、ノーベル賞一六〇人を上回るアメリカに対して、一桁しかない日本という形で表れているのではないかと、考えさせられるところの多い大会であった。